

誰が言ったか「～といます」

最近 NHK のニュース番組で「～といます」という文末表現を耳にすることが増えた。例えば「〇〇さんはとても苦労したといます」などといったコメントの後に、〇〇さんの「いやあ、大変でしたよ…」というインタビュが続くようなケースが多い。この表現について、「誰が言っているのか、あいまいに聞こえる」という問い合わせがあった。なぜそう感じられたのか、次の文で考えてみたい。

〇〇選手は子どものころからスポーツが得意だったといます。

この文には、次の2つの解釈があり得る。

①〇〇選手は「子どものころからスポーツが得意だった」と言います。

②「〇〇選手は子どものころからスポーツが得意だった」といいます。

もし①であれば「 」内は選手本人が話したことばの『引用』だ(これは「～と言っています」と言いかえられる)。他方②であれば、誰かが話す内容の『伝聞』だ。①か②かを判別するのは、例えば「〇〇によりますと～といます」という文に比べて難しい。これが「あいまいに聞こえる」第1の可能性だ。

次に②の場合、「 」内の内容の情報源は誰なのかが問題となる。当然、「選手本人」、「親」、「出身校の恩師」などが考えられる。しかし、「世間一般の人々」と捉えることもできるのが、この表現の特徴だ(この場合「～とされています」と言いかえられる)。誰もが

知る事実という前提なら、放送で情報源は明示されない。その場合、聞き手は、『誰かの証言なのに、情報源が示されない』のか、『誰もが知っているから示されない』のか、判別しづらいのだ。つまりこの表現は二重の意味で「あいまいに聞こえる」可能性があるのである。

ただ、使う側にすればこの表現は、従来の「～ということです」などに比べて利点もあるかもしれない。まず、文字数がわずかだが少ない。また、従来の表現とともに使えば、毎回の文末表現が単調にならずにすむ。

さらに、伝え手の気配を薄める側面もありそうだ。例えば「～ということです」という表現は、伝え手が伝達情報に主観的な判断を入れない(伝達情報から距離を保とうとする)態度が含まれているとされる。つまり、情報をいったんせきとめ、情報に距離を保ちながら報告しようとする伝え手の存在や姿勢が、「～ということです」という表現の中に透けて見えるのである。他方、「～といます」にそれは無い。使う側がこれらを“魅力”と考えれば、この表現の登場は今後も増えるだろう。

しかし、情報の出どころを明確にしておくことが求められるニュース番組であれば、この表現を使う場合は、誰が言ったのかをその前後で明確に示すことが条件となる。そうすることが、聞き手の心理的な負担やとまどいを減らすことにつながるだろう。

井上裕之(いのうえ ひろゆき)